

2024年 愛媛県 マンツーマンコミッショナー 講習会

～愛媛県におけるマンツーマンの推進～

JBAマンツーマン推進プロジェクト
牧野 広良

1. マンツーマンディフェンス導入の前提及び判断基準

【前提】

- (1) 子どもたちがバスケットボールを行う楽しさを担保することが大前提である。
- (2) マンツーマンディフェンスを行う事が大前提である。

【判断基準】

- (1) MCは「ゾーンディフェンスをしていると判断」した場合に「黄旗」の警告を掲げ、改善されない場合は「赤色旗」を上げる。

2. トラップ・予測に基づくプレー

(1) トラップ

- ① オンボールトラップは可能
- ② マンツーマンが前提
- ③ トラップを積極的に用いることの目的は何であるか考慮する。

(2) 予測に基づくプレー

- ① マンツーマンディフェンスを行なっている前提において、予測に基づくプレーとコミッショナーが判断した場合、基準規則違反とは見なさない。
- ② 予測に基づくとは、予測の根拠となる動きがあることを示す。

3. 黄旗と赤色旗の意味

- (1) これまでは「教育的な意味」であり、「理想的なマンツーマンディフェンスの状態以外であれば、瞬時的な状況を含め、全て違反行為とみなし」黄旗をあげることにしていた。これからは「警告的な意味」とし「ゾーンディフェンスをしていると判断した場合、赤色旗に移行するまでの警告として」黄旗をあげることにする。
- (2) 明らかなゾーンディフェンスである（と判断される）場合に赤色旗となる。ゾーンではないがマンツーマンとも言い難い状況がある場合は、これまでは黄旗対象であったが、積極的に黄旗をあげない。予測に基づくプレーを許容するためである。
- (3) ただし、勝利を目指すことを優先するなどの考え等で指導者は、「予測に基づくプレーを許容」を悪用するべきではない。

4. 基準規則前書き

(1) 2022年改訂に至る経緯と改訂の目的

「子どもたちがバスケットボールを楽しめる環境作り」を再考し、「バスケットボール本来の在り方に近づけること」を目指すことを改訂の目的とする。この改訂により、ゾーンディフェンスを許容する事に戻るということではない。

(2) マンツーマンコミッショナー設置の目的

マンツーマンコミッショナー設置の主な目的は、マンツーマンに対する理解を推進し、円滑に試合運営を行い、子どもたちがよりバスケットボールを楽しめる環境を構築すること。

(3) マンツーマンディフェンスとは

マッチアップの状況からポジショニング・ビジョンが適切ではない状況が生じた場合、組織的、意図的でなければ個人のミス、技術不足、判断であると見なして、瞬間の現象を捉えるだけではゾーンディフェンスであるとは見なさない。

(4) ゾーンディフェンスとは

- ①ディフェンスプレイヤーが特定のマッチアップを意識せず、組織的、意図的にエリアを守ること。
 - ②マークマンの動きに対して、適切なポジション対応をしていない（例：マークマンについていかないこと）状況が継続的に行われていること。
 - ③マークマンの動きに関係なく、ボールマンを守り続ける状態。
 - ④隊形を問わず、5人・4人・3人・2人・1人がエリアを守るもの
- * マッチアップが明確ではない状態が続くディフェンス
(例:トラップを続ける中で途中エリアを守る等)

5. 基準規則

(1) マッチアップ

①ディフェンス側プレーヤーは、次の方法等により、マンツーマンコミッショナーにマッチアップが明確にわかるようにすること。(1-2-1)

あ) アイコンタクトや言葉のサイン

い) 指差しなどの手のサイン

う) ボールやオフense側プレーヤーの移動に合わせ、ともに位置を移動している

②ディフェンスを始める位置は定めないが、3ポイントラインの内側を目安とするマッチアップエリア内では、このマッチアップのルールが常に適用される。(1-2-2)

③マンツーマンコミッショナーが、5人のディフェンス側プレーヤーが個々のマッチアップを意識せず、組織的、意図的にボールマンのプレーを守っていると判断した場合は、注意や警告の対象となる。(1-3-1)

(2) オンボールディフェンス

- ①ディフェンス側プレイヤーは、ボールとリングの間に位置し、**マークマンから1.5メートル以内**で、マークマンのシュートチェックができ、1対1のドライブを止められる距離を保つこと。(2-2-1)
- ②オフェンス側プレイヤーがボールをレシーブしたとき、ディフェンス側プレイヤーは、ボールをコントロールしたマークマンをピックアップしていることがマンツーマンコミッショナーに明確にわかるよう、上記の位置と距離にポジションチェンジをすること。(2-2-2)
- ③オンボールディフェンスは、マッチアップし、ボールマンのシュート・ドリブル・パスを制限しようとする事。 (2-3-1)

(3) オフボールディフェンス

- ①ヘルプサイドのマークマンにマッチアップするディフェンス側プレーヤーは、片足または両足がヘルプサイドに触れていること。ただし、ヘルプまたはトラップに行く場合を除く。(3-2-4)
- ②オフense側プレーヤーの動きに合わせ、ヘルプ、ヘルプローション、トラップを行ってよい。(3-2-5)
- ③オフense側チームが1人のプレーヤーだけでオフenseを行うことが明らかなき、オフボールのディフェンス側プレーヤーは、マークマンを少しでも捉えていれば、常に移動していなくても、注意や警告の対象とはしない。(3-3-4)
- ④マッチアップの状況からポジショニング・ビジョンが適切ではない状況が生じた場合、組織的、意図的でなければ個人のミス、技術不足、判断であると見なし、**瞬間の現象**を捉えるだけではゾーンディフェンスであるとは見なさない。(3-3-6)

(4) ヘルプディフェンス

- ①オフense側が有利となる攻撃があると予測できた場合、**ヘルプすることは可能**とする。
(4-3-1)

(5) トラップディフェンス

①オンボールのオフense側プレーヤーに対して、複数のディフェンス側プレーヤーがボールを奪うことができる距離に接近してディフェンスすることを「トラップディフェンス」という。(5-1-1)

【補足】 **トラップディフェンスの定義：ボールをスティールできる距離における数的優位な守り方**

②ディフェンス側プレーヤーは、オンボールのオフense側プレーヤーにトラップディフェンスをすることができる。(5-2-1)

③ディフェンス側プレーヤーは、オフボールのオフense側プレーヤーにトラップディフェンスをすることはできない。ただし、制限区域内において、予測に基づいてオフボールのオフense側プレーヤーをトラップすることはできる。(5-2-2)

④トラップディフェンスの後、ディフェンス側プレーヤーは、直ちに自分のマークマンに戻るか、ローテーションを行い、マンツーマンコミッショナーにマッチアップが明確にわかるようにすること。(5-2-3)

- ⑤スローインをするプレーヤーにマッチアップするディフェンス側プレーヤーは、制限区域内のオフボールのオフense側プレーヤーにトラップディフェンスをするために、マークマンから1.5メートル以上離れることができる。(5-2-4)
- ⑥全ての場面においてボールをコントロールしているプレーヤーへのトラップは許される。
(5-2-5)
- ⑦ヘルプディフェンス後に、オンボールのプレーヤーに対してトラップディフェンスになってもよい。(5-2-6)
- ⑧マッチアップするオフense側プレーヤーの力量が低い場合、距離に関係なくトラップに行く行為は、育成の観点から不適切であり、行わせるべきではない。(5-2-7)
- ⑨連続的にトラップが行われる場合、トラップからボールのあるところへのトラップはよいが、エリアに戻ってからトラップを仕掛けることは違反行為と見なす。(5-3-3)

(6) スイッチ

- ①ボールを保持していないオフense側プレーヤー同士をマークしているディフェンス側プレーヤーのスイッチはエリアを守る目的であると判断された場合、違反行為と見なす。
(6-2-2)

(7) プレスディフェンス

- ① プレスディフェンスであっても、マッチアップの基準に合致したディフェンスでなければならず、様々なゾーンディフェンスまたはコンビネーションディフェンスを行ってはならない。(7-1-1)
- ② プレスディフェンスを開始する位置は、フルコート、3/4コート及びハーフコートなど、どの位置であってもよいがマッチアップエリア以外において、チームとして個々のオフENS側プレーヤーに対してピックアップするディフェンスを行う場合は、スローインするオフENS側プレーヤーにマッチアップしなければならない。(7-1-2)
- ③ プレスディフェンスの際、ボールをコントロールしているオフENS側プレーヤーをトラップすることはできるが、トラップ後はコミッショナーにマッチアップが明確にわかるようにすること。(7-1-3)
- ④ プレスディフェンスをする際には、マッチアップが行われていることが必要である。(7-2-1)
- ⑤ スローインするプレーヤーをマッチアップするディフェンス側プレーヤーがエリアを守っていると判断された場合、違反行為と見なす。(7-2-2)
- ⑥ マッチアップするオフENS側プレーヤーがいないが、マッチアップエリア内に戻っているディフェンス側プレーヤーがいることは構わない。(7-2-3)

(8) 予測に基づくプレー

- ①マンツーマンディフェンスを行なっている前提において、予測に基づくプレーとコミッショナーが判断した場合、基準規則違反とは見なさない。(8-1-1)
- ②予測に基づくとは、予測の根拠となる動きがあることを示す。(8-2-1)
- ③マークマンを意識せずにエリアを守ることはマンツーマンの趣旨に反するため違反行為とみなす。(8-2-2)

6. 処置と罰則

(1) マンツーマンペナルティの罰則

①1回目の赤色旗は警告でありマンツーマンペナルティは記録されないが、罰則として相手チームにボール保持が与えられる。ボールの保持が変わらなかった場合（アウトオブバウンズ、ディフェンス側のファウル、ディフェンス側のキックボール）は事象の起こった近い位置からのスローインとし、それ以外は相手チームのフロントコートのスローインライン

（U12ではスコアラズテーブルの反対側のセンターラインの延長線上）からのスローインでゲームを再開する。（9-1-3）

②ただし、アンスポーツマンライクファウル・ディスクォリファイファウルなど、フリースローの後にディフェンス側のボール保持から再開するケースはファウルの処置を優先する。（9-1-4）

(2) 第4クォーターおよびオーバータイムの処置

- ①1回目の警告の場合は、そのまま速やかにゲームを終了し、必要に応じてゲーム終了後に当該チームのコーチに対して違反内容を伝える。(12-3-1)
- ②2回目以降の警告の場合は、マンツーマンペナルティの処置を行った後、状況に応じて対応する。トーナメント戦でフリースローを行っても勝敗に影響がない場合は、マンツーマンペナルティは記録するが、罰則を適用しないこととする。(12-3-2)

(3) 1回目の警告でマンツーマンペナルティとなる場合

- ①第4クォーターおよびオーバータイムにおいて、ゲームクロックが残り2:00以下で止まった際の警告については、1回目でもマンツーマンペナルティ(スコアシートへの記載+フリースロー+スローイン)とする。(13-1-1)
- ②マンツーマンコミッショナーが意図的なイリーガルディフェンスであると認めた場合は、どの時間帯においても、1回目の警告でマンツーマンペナルティとすることができる。この場合は、「黄色(注意)」の旗を省略することもできる。(13-1-2)

2023年12月追加事項

【ケース12】

- ▶ スローインの際にイリーガルなディフェンスが起こった場合のゲームを止める処置について（コート内のプレーヤーがボールに触れる前の状況を①、コート内のプレーヤーがボールに触れた後の状況を②とする）
- ▶ → ①の状況でイリーガルなディフェンスに MC が気づいた
- ▶ 場合、ブザー等を用いてゲームを止めることができる。
- ▶ → まだプレーが始まっていないので警告注意を与えてよい。
- ▶ → ①の状況で赤色旗をあげた場合は、ゲームを止めた後、赤色
- ▶ 旗の処置を行う。
- ▶ → ボールがコートに投げ入れられた後にブザーを鳴らした場
- ▶ 合、スローインの始まる時点までショットクロックを戻す。
- ▶ 補足) ゲームクロックが動いていない状況で対応を行った方
- ▶ がゲームの混乱が少なくなるを考え、ライブとなっ
- ▶ ていない状況でゲームを止める処置を取ることを優先した。

基準規則に照らし合わせた ケーススタディ 1

- ▶ ①ディフェンスプレーヤー（ビッグマンのケースが多い）が、ゴールした付近にスティするケース
- ▶ ②マッチアップが定かでない状況から、トラップがスタート（トラップ要員化もある）するケース
- ▶ ③ピックアップしているような始まりを醸し出すものの、すぐにボールウォッチャーとなってしまうことが、継続的にあるケース
- ▶ ④オールコートディフェンスにてスローインのプレーヤーにつかないケース

基準規則に照らし合わせた ケーススタディ 2

- ▶ ①アイソレーション時のディフェンスのケース
- ▶ ②スクリーンを外す際、離してしまうケース
- ▶ ③ディフェンスが変わった時におけるマッチアップがはずれたケース
- ▶ ④ゾーン（的な）の守り方で、旗の降るタイミングのケース